

令和2年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

1 豊かな人間性と国際性の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> 学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時） 	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が</p>	<p>一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】（生徒）</p> <p>A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 前回7月のアンケート結果は85.0%であり、今回2.1ポイント上昇した。これは「一日一善のぼり」を持って毎朝の挨拶運動、グッドマナーキャンペーン、行事、機会のあるたびに呼びかけたこと、さらに振り返りアンケートの実施の成果であると思われる。</p> <p>【今後の取組】 この取組は今年度から始めたもので、成果はあったもののまだまだ全生徒に浸透するには至っていない。七高生の心根の良さをさらに伸ばし広げるよう、来年度も継続して取り組んでいきたい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「能登の里山里海」特別講座（1年） 令和2年度ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業（2年） 	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>「ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>4月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p>A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 例年取り組む予定である2年生のインターンシップとその事後学習を通して、生徒たちは地元の企業について多くを学び、郷土愛を育む機会があるが、今年度は実施することができなかったにも関わらず肯定的なアンケート結果であった。これは「探究」で能登を題材として取り上げることが多いためと考える。</p> <p>【今後の取組】 次年度はインターンシップを実施し、生徒が能登の企業に興味関心を高め、大学卒業後に地元で活躍しようとする人材を育成できるよう取り組んでいきたい。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 異文化交流 	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>「異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が湧いた」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p>A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 A+B評価が1年生79.3%、2年生81.4%、3年生88.3%であり、1年生僅かだが他学年と比較して低い数値になっている。</p> <p>【今後の取組】 1年生から探究の時間等でSDGsを学ぶ機会が多い。次年度もこの目標を達成するための観点を持ちながら探究活動に取り組み、地球規模での問題解決を考える中で異文化を理解しようとする態度を養いたい。</p>
学校関係者評価委員の評価		豊かな人間性を形成するためには失敗や挫折の経験が不可欠である。失敗しないように先回りするのではなく、敢えて失敗させる指導も求められる。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		探究活動や部活動などでは、生徒の思うようにうまくいかないことはよくあるが、失敗を恐れずにチャレンジする態度を育むとともに、失敗の経験を次のチャレンジに活かす指導を心がける。			

2 進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。</p> <p>・生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 志を貫くためのキャリア教育 キャリア教育講演会 全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 学習時間調査 ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 進路情報の発信 進路講演会 難関大学入試問題解法研究 金沢大学入試問題解法研究 習熟度別学習指導（週末課題） スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 金沢大学キャンパスビジット等 京大サマースクール 金沢大学による出張講座 保護者への進路説明会 学習計画の作成とチェック 志望校群別検討会（2年） 志望理由書の作成（1・2年） 批判的思考力育成（3年） 放課後の学習会 出願校検討会（3年） 	<p>【成果指標】 （生徒学年別） 第1志望に対して明確な理由がある。</p>	<p>高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して</p> <p>A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p><生徒：1年生> 125名（125%）A <生徒：2年生> 166名（100%）A <生徒：3年生> 178名（96%） B</p>	<p>【判断基準】各学年目標 1年100（5割） 2年167（7割） 3年186（8割）</p> <p>【分析】全学年で前期よりも高まっている。これはキャリア教育講演会や学年集会などの取組による結果と考える。また、コロナ禍を通じて自分に何ができるか、どう社会貢献してかなど、自身の進路について考えさせる機会を持つことができたのも要因として考えられる。</p> <p>【今後の取組】今後担任との面談を経て、より具体的な将来像を構築できるよう支援を継続的に行っていく。また外部の支援を得ながら1年生では学問調べ、2年生では動画を利用した大学調べなど、新しい形での指導も取り入れ、より志望を明確にするための取り組みを行う。</p>
		<p>【成果指標】 （1年生生徒） 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。</p>	<p>（進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満</p>	<p>【7月進研模試から1月進研模試で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】</p> <p>B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 体校の影響で、家庭学習の習慣をなかなか身につけられなかったが、進路学習を進め学習に対するモチベーションを高めることで学力を伸ばすことができた。</p> <p>【今後の取組】 進路学習を進め、学習に対するモチベーションを向上させてきたが、一過性のものにならないように継続的なフォローが必要である。ホームルーム等での声掛けや面談を通して頻繁に刺激を与えていきたい。また1年時の復習や弱点分野克服に向けた学習計画を立て学習習慣を定着させるよう支援していく。</p>
		<p>【成果指標】 （1年生生徒） 着実な学力形成を果たしている。 （進研模試1月）</p>	<p>1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が</p> <p>A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満</p>	<p>【1月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】</p> <p>B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 成績上位者を増やすことはできたが、いまだ家庭学習時間が少なく、学力が不十分な生徒がいることが課題である。</p> <p>【今後の取組】 基礎学力が定着している生徒には、継続的に特別講座や添削指導を行って、発展的な思考力等を養う。あわせて中下位層にも着実な学力をつけるよう基礎基本の指導を徹底し、意識を高揚させる指導をする。</p>
		<p>【成果指標】 （2年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試7月と</p>	<p>2年次に、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 200人以上 B 160人以上</p>	<p>【進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較】</p> <p>C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 ・全体的に基礎基本が不十分であり、加えて思考力・読解力の強化も並行して行う必要がある。学習時間は全体的に増</p>

	1月の3教科総合偏差値の比較	C 160人未満		<p>加傾向だが、必ずしも充分といえない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績上位者においても十分な学習時間が取れていない。 <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共通テスト初年度の状況を踏まえ、基礎基本や読解力・思考力定着のために授業改善に取り組む。 ・個人面談を通して生活習慣、学習習慣の改善の指導を行う。 ・習熟度別授業や課題や講座などの指導を継続する。
	<p>【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を伸ばしている。 (進研模試1月)</p>	<p>1月進研模試3教科総合で学力到達度(GTZ)のSランクの生徒が</p> <p>A 40人以上 B 35人以上 C 35人未満</p>	<p>【1月進研模試3教科総合での学力到達度(GTZ)】</p> <p>C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】上位層の育成が不十分である。</p> <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・難関大学についての進路情報の提供を難関大学志望者に提供し目的意識を維持させ、1ランク上の学力定着に繋げる。 ・個別添削指導や学習会を難関大学志望者対象に実施する。
		<p>1月進研模試での5教科総合偏差値で60以上の生徒が</p> <p>A 100人以上 B 80人以上 C 80人未満</p>	<p>【1月進研模試5教科総合偏差値】</p> <p>B</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】5教科型学習へのシフトを秋頃から指導して結果、生徒に浸透してきた。</p> <p>【今後の取組】</p> <p>さらに浸透させるため学習時間の確保を促すとともに、全員一律の基礎的な課題に加えて、自ら計画、実施、点検、改善できるよう、学習の時間配分等も含めて指導する。</p>
	<p>【成果指標】 (3年生生徒) 個々の志望大学の結果による。</p> <p>*スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。</p>	<p>スーパー難関大学の合格者が</p> <p>A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満</p> <p>難関大学10大学の合格者数が</p> <p>A 25人以上 B 20人以上 C 20人未満</p> <p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 50人以上 B 40人以上 C 40人未満</p> <p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 160人以上 B 140人以上 C 140人未満</p>	<p>【大学入試結果】</p> <p>スーパー難関大学 B 難関10大学 C 金沢大学 C 国公立大学 C</p>	<p>【判断基準】大学入試結果で判定する。Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパー難関大学の合格者数は昨年並みであるが、難関10大学の合格者数を大きく減らした。低学年時からの基礎力養成が課題である。 ・大学入試共通テストの導入により出題形式も変化したが、大きな落ち込みは見られず、事前の対策や準備が奏功したといえる。一方で共通テストでは読む量が増加したことで、生徒の読解力が結果に大きな差をつけたといえる。 <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次から3年間を見通した中長期的な学習計画を、各教科で再考する必要がある。そのうえで定期考査や模試ごとの短期的なPDCAサイクルをうまく回せるよう現在の仕組みを再考する。 ・各教科で「主体的で対話的な深い学び」の実践をとおして、思考力・判断力・表現力とともに読解力の育成を図る。
学校関係者評価委員の評価	キャリア形成のミスマッチを防ぐためにも、生徒に将来の自らの姿を具体的に描かせることが必要である。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	生徒自身の興味関心を学問につなげる活動を継続するとともに、生徒自身が主体的に目標設定できるよう支援する。			

3 教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> 生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> スマートフォン・携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策ための資料の作成と配付 	<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p>B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 結果は中間評価96.2%から1.3ポイント減少しB評価になった。A評価にあと0.1ポイントである。しかし昨年度の93.3ポイント比べると向上している。今年度はコロナ禍で計画的な啓発ができなかったが、あらゆる機会をとらえてネットトラブル防止啓発の取組が功を奏しているといえる。</p> <p>【今後の取組】 ネットトラブル防止啓発資料の活用に加え、生徒自身が将来に向けて取り組まなければならない課題として、生徒会にネットトラブル防止啓発活動を企画・実行させる。加えてネットトラブルに関する事案研究などを通して、教員の生徒指導力向上を図る。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理能力などの実践的な指導力の向上に努める。 校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進 学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示 Classiを活用した予習内容の可視化 予習チェックの呼びかけ 「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有 批判的思考力育成課題「知のよみち」の授業での更なる活用を図るために編集を工夫 	<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>国語・数学・英語において「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語における「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が</p> <p>A 70%以上 B 65%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【12月実施第2回生徒による授業評価】</p> <p>D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 第1回より0.7ポイントの微減である。「ややあてはまる」まで含めると86.7となるので、予習に対する意識は定着しているが、継続的な学習習慣は確立されていないと言える。学力層によって差がある。</p> <p>【改善策】 学習到達度に応じた予習の提示を工夫改善する必要がある。各教科会議で検討し、教科間で共有する。</p>
		<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が</p> <p>A 65%以上 B 60%以上 C 55%以上 D 55%未満</p>	<p>【12月実施第2回生徒による授業評価】</p> <p>B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 第1回より4.6ポイント上昇した。研究授業及び教科会議での指導方法の共有や活発なグループ活動によって上昇したと考えられる。</p> <p>【今後の取組】 各教員の授業改善シートから、効果があった取り組みを取り上げ、全体で共有する。</p>
		<p>【成果指標】 （若手教員）</p> <p>OJTをとおして教員としての成長を実感できる。</p>	<p>OJTにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 100% B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p>D</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 一部の教員が業務に達成感を感じられていない。背景には、若手教員に割り振られる業務には遂行にあたって創意工夫をはかる余地が少ないことが考えられるとともに、働き方改革の推進が不十分であることも考えられる</p> <p>【改善策】 各課の主任が、達成感を持てるよう業務の意義やねらいを丁寧に説明するとともに、工夫や改善を促していく。</p>
学校関係者評価委員の評価		若手が仕事を通して成し遂げたいと思うことと、目の前の業務とがどのようにつながるかということを示すことが若手の育成には必要である。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		若手教員が充実感や達成感を持って業務にあたることができるよう、一つ一つの業務について主任が丁寧に説明、指導する。			

4 魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・特色ある教育活動（第4期SSH事業、NSH事業）を全校的に推進し、学校全体の活性化を図る。</p> <p>また、その活動・成果を地域の小中学生に広報し、本校の魅力として伝える。</p>	<p>・学校設定教科「探究」による探究能力の育成</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>「4月に比べると探究能力が「ついた」と評価した生徒の割合が高まっている。</p>	<p>4月に比べると探究能力が「ついた」・「ややついた」と評価した生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p>A</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】どの学年も前年度と比較すると、探究能力が「ついた」と答える生徒が増加している。</p> <p>【今後の取組】現在の取組を継続し、レベルの高い探究の指導を維持していく。また、次期申請も視野に入れ、新しいアイデアも取り込み、さらに発展を図る。</p>
	<p>・物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>全国大会相当への出場の決定数が増えている。</p>	<p>全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が</p> <p>A 4以上 B 3 C 2 D 1以下</p>	<p>10件</p> <p>A</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生バイオサミット 文部科学大臣賞 ・石川県科学作品コンクール 石川県教育委員会賞 ・日本学生科学賞 石川県最優秀賞 ・SSH 全国研究発表会 ポスター発表賞 ・全国高等学校総合文化祭 研究奨励賞 2件 ・グローバルサイエンティストアワード 優秀賞 ・第15回 科学の芽賞 学校奨励賞 ・次年度全国総合文化祭県代表 2件 <p>上記のように研究関連の入賞や全国大会への出場が増えている一方で数学オリンピックなどの筆記試験を伴うコンテストの成果があがっていない。</p> <p>【今後の取組】知識と思考力を要する筆記試験については、学習会等を実施する。研究については、現在の高いレベルを維持するとともに、大学等の支援を受け、さらに内容を深める。</p>
	<p>・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進</p> <p>・複数年を見通した指導の構築</p>	<p>【成果指標】（生徒）</p> <p>左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。</p>	<p>左記大会やコンテストに参加し</p> <p>A 優勝を含む入賞 6件以上 B 入賞 5件 C 入賞 4件 D 入賞 3件以下</p>	<p>4件</p> <p>C</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郷土研究部 …1件 ・外国語研究部 …0件 ・NSH …3件 <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後も継続して各種大会・コンテストに参加・応募し、文系フロンティアコースの教育活動を客観的に測る。 ・次年度に向けて、取り組み内容の見直しを図る。

	<ul style="list-style-type: none"> 文系フロンティアコースに所属する生徒の実用英語技能検定2級以上における取得率の増加 	<p>【成果指標】 (生徒) 左記の検定合格者数が増加している。</p>	<p>左記検定における合格者数が</p> <p>A 40人以上 B 36人以上 C 34人以上 D 33人以下</p>	<p>31名 D</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> 21H 取得者数 27人 11H 取得者数 4人 <p>11Hの取得者数が例年に比べて5人程度少ない。</p> <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校設定科目「Speak Out」で英検の筆記問題に対応できる力も併せて向上させる。
	<ul style="list-style-type: none"> 上位進出を目指した質の高い日々の活動 部主将会議の開催 上位大会出場を称える広報活動の工夫 	<p>【成果指標】 (運動・文化) 全国大会に15種目以上、北信越大会・北信越新人大会・ブロック大会に50種目以上の部活動が出場している。</p>	<p>全国大会・北信越大会・北信越新人大会・ブロック大会に出場した種目が</p> <p>A 全国大会15種目以上 北信越・北信越新人50種目以上 B 全国大会15種目以上 北信越・北信越新人45種目以上 C 全国大会10種目以上 北信越・北信越新人45種目以上 D 全国大会10種目未満 北信越・北信越新人45種目未満</p>	<p>〈運動部・文化部で全国・北信越大会に出場した種目数〉</p> <p>全国大会 11種目 北信越・北信越新人 5種目 D</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全国大会出場数11種目…運動部0、文化部11 北信越大会出場数5種目…運動部4、文化部1 <p>今年度コロナ禍のため全国総体等各種大会が中止になった。その中で文化部の大会は出品のみの参加や、リモートによる発表の大会が開催され、優秀な成績を収めることができた。中でもSSC(スーパーサイエンスクラブ)の成果が顕著である。</p> <p>【改善策】コロナ禍のため、例年の達成規準での判断はできない。活動の制限が多くかかる中、感染拡大防止を最重要課題としながら、できる活動の範囲で最大の成果をあげるよう働きかけを今後も継続していく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>		<p>探究活動をとおして、知識や思考力だけではなく生徒のコミュニケーション能力も同時に育成してもらいたい。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>		<p>協働的な活動のなかで他者への思いやりの気持ちや円滑なコミュニケーションの作法を身につけられるよう支援する。</p>			

5 働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。</p>	<p>・月2回の定時退校日と8月の閉校日を設ける。 ・最終退校時刻を意識して計画的に業務に取り組む。 ・長期休業中にまとまった休暇を取得する。 ・年休を計画的に取得する。 ・会議のペーパーレス化をさらに進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。 ・情報共有の仕方を工夫し、職員朝礼を原則として週に1回とする。 ・業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。 ・部活動の休養日を適切にとる。</p>	<p>【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。</p>	<p>業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p>C</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 今年度はコロナ禍により従来なかった業務に時間を取られることが多く、そのことが多忙感を助長しているものと思われる。感染拡大防止のためお措置を講じながら、今以上の業務効率化を図る必要がある。</p> <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サーモグラフィーカメラを導入することで、教室での検温業務を省く。 ・Classi や GoogleClassroom などを活用して、アンケートや連絡の効率化を図る。 ・会議の運営方法（ICT機器利用等）を工夫するとともに、会議の設定を勤務時間内に行う。 ・校務分掌や学年の業務内容を改めて精査し、業務の平準化を進める。
<p>学校関係者評価委員の評価</p>		<p>ICTをさらに整備、活用して業務の効率化を図り、多忙化改善につなげてもらいたい。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>		<p>GIGA スクール構想を推進するとともに、すべての教員がICTを活用できるスキルを身につけて業務の効率化を図る。</p>			